母親への服薬指導の検討
～夜間の問い合わせ件数を調査して～

安田　春子，斉藤千穂里，長澤恵美子
南出　弘美，本山　博恵

札幌社会保険総合病院　4階東病棟

当科では夜間、小児科に関する問い合わせが多く、夜間の問い合わせ件数と内容を調査したところ、患者家族が薬剤の適切な使用法を把握していないため、家庭内でも対処できる発熱や、軽度の喘鳴などへの処置が出来ていないことがわかった。

そこで、自宅で母親が子供の発熱などに対応でき、薬を正しく使用できるように服薬指導の内容を変更した。その結果母親の夜間の不安が軽減でき、母親の知識が深まり、家庭でも発熱などの対処が自信を持ってできるようになり、夜間の問い合わせ件数が減少した。

キーワード：服薬指導、夜間問い合わせ、発熱への対処、喘鳴への処置

はじめに

当科では、夜間小児科に関する電話での問い合わせが多く、調査したところ、薬剤の適切な使用法を把握していないため、家庭内でも対処できる発熱や軽度の喘鳴などへの処置ができていないことがわかった。そこで、自宅で母親が子供の発熱などに対応でき、薬を正しく使用できるように、服薬指導を改善することを目的として実施したところ、夜間の問い合わせ件数を減少することができたので報告する。

研究方法

1）研究期間：平成10年1～5月
2）対象：平成10年1～5月に、肺炎や気管支炎で当科に入院した患児の母親270名。
3）方法：質問紙表による聞き取り調査。

これに基づき改善した方法を使用して前後（平成9年と10年の1　5月）の夜間の電話での問い合わせ件数を評価した。

実施の経過

従来の方法は、以下の1)～5)であった。

1）入院後に処方されている薬の説明を口頭で説明していた。
2）薬はすべてナースステーションに保管していた。
3）時間ごとに看護婦が配薬していた。
4）発熱時の対処は、主に看護婦が判断し薬を使用していた。
5）退院時は薬剤師からの指導を行っていた平成10年1月より入院した児の母親への服薬指導の内容を以下のように変更した。

ア．薬の見本を貼付し、薬名、効用、用法を記入した用紙を作成し、ベッドサイドに掲示する。また、この用紙を使用して薬の説明を行う。
イ．薬は母親管理として朝、昼、夕、20時と、1日分の薬がセットできる仕切りのある容器を使用した。消灯までに、翌日1日分の薬を容器にセットすることとし、正しく薬がセットされているか、又看護婦が訪室時にその容器を見て薬ののみ忘れがないかの確認を行った。
ウ．発熱時の処置は、母親と相談しながらクーリングを行うか、解熱剤を使用するかなど、適切な方法を決定していった。
エ．自宅での発熱時に実施していた方法を聞き取り調査し、パンフレットに基づき解熱剤を使用できる体温、及び間隔、悪寒、熱感、発汗時の対処法

などを指導した。又、母親への聞き取り調査と指導の時期は、慌ただしい入院初日は避けて、入院2日目以降とした。患児の状態が落ち着いている時や昼寝中の時など、心身ともに母親がゆとりのある時間を利用して行えるよう配慮した。

ア～エの方法をとる前と後の5ヶ月間で夜間の問い合わせ件数と内容を調査した。

小児科の入院は季節により変動が大きいため前、後とも同じ季節になるように期間を設定し調査した。

結　果

薬に関した夜間の問い合わせ件数が従来の服薬指導の方法では、34件であったが、指導開始後、19件に減少した。

考　察

聞き取り調査では、入退院を繰り返している児の母親の中には、正しく解熱剤を使用できている母親もいたが、入院経験の少ない母親の中には、子供の体が熱いと感じてはいるが、体温を測らず坐剤を挿入したという内容や、腋窩や鼠径部を冷やす方法は、指導を受けて初めて知ったという解答もあり、聞きとり調査を行うことで発熱に対する処置の実態を知ることができ、正しい対処法が指導できたと思われる。

従来、薬は看護婦が管理していたが、改善した方法をとることにより、母親の薬に対する知識が深まり、家庭でも発熱などの対処が自信を持ってできるようになり、夜間の問い合わせ件数が減少したと思われる。その他の内容の中には、以前に処方されていた坐薬が時間が経っても使用できるかどうかの問い合わせがあり、薬の保管や使用期限等についての指導の必要性を感じた。又、指導した内容に関して、自信がついたとの返答が得られたが、今後は、退院後実際に行った発熱時の対処法を調査し、更なる指導の充実をはかって行きたい。

結　語

服薬指導の方法を改善することにより、母親の夜間の不安を軽減し、自宅で発熱に対して正しく対処できるようになったと思われる。

文　献

吉武香代子：子どもとくすり　その2，小児看護，18（12）：1663－1669，1995

A study of the instructions to patients' mothers concerning internal use medicine
－An investigation of cases in which mothers call this nurse station at night－

Haruko YASUDA, Chihori SAITOU, Emiko NAGASAWA
Hiromi MINAMIDE, Hiroe MOTOYAMA
4th floor east wing nurse station,Sapporo Social Insurance General Hospital

At night, patients' mothers call our ward with questions concerning children's diseases. We investigated the type of questions asked and found that most calls are due to the fact that the patients' families don't know how to use pediatric drugs and, consequently, they couldn't take care of cases of high fever or stridor.

Therefore, we changed to teach parents how to administer drugs to their children, in order that the parents would be better able to take care their children. As a result, the parents'uneasiness decreased and the parents acquired greater acknowledgment concerning children'diseases. The parents have been much better at taking care of the children's diseases, and night calls to our ward have decreased.